

CONTENTS

- 【研究員調査・研究レポート】 ケニア共和国 自然林再生プロジェクト 経過報告1
- 【生態学寸描】 三浦半島沿岸域の砂浜生態系の現状と課題3
- 【生物保全・再生の知恵】 相模湾沿岸におけるアカウミガメ産卵巣保全の取り組み4
- 【森づくりの現場から】 「森づくりははじめました」7
- 【お知らせ】 平成25年度人材育成事業 イベント開催のご案内8
- 【研究員活動記録】 2013年4月～5月8
- 【編集後記】8



【研究員調査・研究レポート】

ケニア共和国 自然林再生プロジェクト 経過報告

IGES 国際生態学センター研究員/林 寿則

はじめに

ケニアにおける自然林再生プロジェクトは、2005年12月に横浜国立大学と国際生態学センター（調査者：宮脇昭センター長、目黒伸一主任研究員、林）との共同プロジェクトとして開始され、2010年からは横浜市立大学（藤原一絵特任教授）と活動を継続している。現地調査では、ナイロビ大学、ケニア森林サービス省、現地森林コンサルタントの各スタッフと共に自然度の高い森林群落の種組成、構造、立地環境等を調査し、熱帯乾燥林の類型化と森林再生活動を行っている。

標高約1,700mに位置する首都ナイロビ周辺では、キク科の *Brachylaena huillensis* やトウダイグサ科の *Croton megarocarpus*、カネラ科の *Warburgia uganden-*

sis、ミカン科の *Teclea simplicifolia* などが生育する乾燥林とマメ科の *Newtonia buchananii* やノウゼンカズラ科の *Markhamia lutea* などが優占するやや湿潤な立地、水分条件の良い谷状地に生育する森林が調査された。

2007年4月には、ナイロビ郊外のンゴンゴ・ロード・フォレストにおいて第1回植樹祭が開催され、現地関係者や地域住民、日本からのボランティア等、約170名によって1,400本の幼苗が植樹された。2009年4月には第2回植樹祭が行われ、300名、3,000本のポット育苗の幼木が植えられた。また、2012年4月及び2013年4月にはナイロビ大学シロモ・キャンパスにおいて植樹祭を開催した。

ナイロビの北西約200kmに位置するマウ・フォレストは、東アフリカにおける最も広大な森林の一つに数えられている。ビクトリア湖のある西部地域は雨が多く湿性林が発達し、本プロジェクトの植樹計画地が

位置する東側（スルル・ブロック）では、高木層にヒノキ科の常緑針葉樹 *Juniperus procera* やマキ科の *Podocarpus latifolius*、常緑広葉樹の *Prunus africana*（バラ科）や *Nuxia congesta*（フジウツギ科）が優占する乾燥林が発達している。しかし、この数十年の大量の移民流入による違法伐採、開墾により 25% に及ぶ森林が破壊された。

当地域では 2012 年 4 月（約 8,000 本）及び 2013 年 4 月（約 13,000 本）に地域住民とともに植樹祭が行われた。



マウ・フォレスト (2013 年 4 月)

森林再生地の生育状況

ンゴング・ロード・フォレストでは、植樹 2 年目以降より樹高の伸長生長が著しくなり、現在、樹高 5 ~ 6 m の密生した森林が再生しつつある。鬱閉した樹冠の中では、直射日光による表土の乾燥が防止され、また、当初繁茂した *Lantana camara*（シチヘンゲ）などの外来植物の生育も抑制されている。



ンゴング・ロード・フォレスト 植樹 6 ヶ月後

植樹樹種の生長調査からは、*Markhamia lutea*（ノウゼンカズラ科）、*Croton megarocarpus*（トウダイグサ科）、*Brachylaena huilensis*（キク科）などの生長が良好な経過を示している。

山地地域では、広大な面積を対象として森林再生を進めていく必要があることから、ケニア方式と混植・



植樹 4 年後の同場所

密植方式をともに活用しながら現地の自然環境及び社会情勢に適した森林再生手法の確立を目指したい。本プロジェクトは、株式会社山田養蜂場、日置電機株式会社、三菱商事株式会社、毎日新聞社のご支援により推進しています。

植樹ツアー参加者の感想

赤道直下、標高 2,700 m のケニア東部の山地で行っている水源涵養林再生プロジェクトに参加しました。村民と宮脇先生以下、ボランティアも心一つにして近い未来、鬱蒼とした森の再生を信じて、コツコツとポット苗を植えました。3, 4 才の子供たちが裸足で一生懸命に苗を運んだり、ポットを回収したりする姿に感動します。この子供たちが大人になったときには、この大地に必ず豊富な水、肥沃な土地、様々な生き物が蘇ってくると信じます（星野純明）。

ナイロビ大学に昨年植樹した木々は大きく成長して、私達の背を越すものもあり、驚き喜びました。学生さん達は一生懸命植樹し、私は拙い英語での国際交流、地球環境への貢献という豊かな気持ちを与えられました。マウ・フォレストの方は高地のため霜害があり、木々の成長は期待通りではありませんでした。今年も小さな子供さんや少年少女、若いママさん達との交流が楽しかったです。木々の成長が水を豊かにしますように（和田洋子）。

私にとって初めての植樹でいきなりケニアに行けて満足でした。ナイロビ大学の学生や村の子供達と一緒に植樹出来て楽しかったです。日本では馴染みのない樹木がほとんどで、これらの違いは気候風土や土壌の性質などから来ているものだと理解しました。粘着質で硬い土には苦勞しました。セレモニーの時間が準備も含めて少し長く感じました（谷合初恵）。



はじめに

みなさんの「砂浜」とはどんなイメージなのだろうか。照りつける太陽の下、エメラルドグリーン的大海と、どこまでも続く白い砂浜。海の家が並び海水浴客で賑わう灰色の砂浜。白砂青松のごとき松林と砂浜。サーファーが海にエントリーする砂浜。ウミガメが産卵に上陸する夜の砂浜と、様々な砂浜の景色があることだろう。

生物の生息環境としての「砂浜」とは、砂、砂利、砂礫などが刻一刻と変化する波の力と重力の微妙な釣り合いの下で堆積することにより形成される日和見的な要素の強い不安定な環境であり、日々形状を変化させるのが、本来の砂浜の姿である。また、遮蔽物がほとんどない砂浜の地表は、太陽光に熱されて日中にはしばしば 50℃を優に超える灼熱の世界になることもある。したがって、「砂浜」という環境は、多くの生物にとって生息しづらい環境である。

砂浜の潮上帯に生息する生物は、共通して夜行性の生態をもつ。この生態は日中の砂表の高温、乾燥を避け、鳥類などの捕食者から逃れるために適していると考えられる。そのため、日中に砂浜を訪れる多くのヒトの目には、砂浜は生物のほとんどいない、不毛の地として映るのであろう。しかし、目を凝らして砂浜を注意深く観察すると、そこには多様な生物たちが織りなす複雑な生態系が存在しているのである。



砂 浜

三浦半島沿岸域の砂浜生物相

相模湾西部に位置する三浦半島には、湾奥部にみられる湘南海岸のような、大規模な砂浜域は見られないが、岩礁海岸に挟まれるように、小規模な砂浜が点在している。岩礁帯と同様に、砂浜にも生物の帯状の分布構造があり、潮上帯、潮間帯、潮下帯で異なる生物群を形成することが古くから知られている。

三浦半島の砂浜の潮上帯は、ハマダンゴムシやヒメハマトビムシ、スナガニ類などの甲殻類、ヒョウタンゴミムシなどの昆虫類、イソミミズなどの貧毛類など温帯域や熱帯域の砂浜で優占種となる生物が混在する生物相から形成されている。

砂浜潮上帯に生息する生物は、個体数の多いハマダンゴムシやヒメハマトビムシ、イソミミズのように打ち上げられた海藻などの有機物や分解過程で繁殖する細菌などを餌とする腐食性の食性をもつ生物と、個体数の少ないスナガニ類やヒョウタンゴミムシ、ハネカクシ類の一部など肉食性の食性をもつ生物に二分される。

砂浜の潮上帯に生息する生物の種組成は、打ち上げられる海藻などの有機物を食物連鎖の起点とすることから、群集の規模となる個体数や種数は、有機物の現存量により決定づけられることが報告されている。



ハマダンゴムシ



ヒメハマトビムシ



スナガニ



ヒョウタンゴミムシ

砂浜生態系の現状

海岸に打ち上げられた大量の海藻は、多くの人にとって見た目が悪く、悪臭を放つ「ゴミ」として直ちに清掃されてしまう。しかし、視点を変えて、生態学的な視点でこれらの海藻を見るとどうだろう。砂浜の潮上帯には、本来、打ち上げられた有機物を起点とする食物連鎖が形成されている。

これらの生物にとって、不定期に打ち上げられる海藻などを人為的に処理すること（重機などを用いて砂浜に埋めたり、他の場所で焼却処分すること）は、その砂浜に生息している腐食性の生物から餌を奪い個体数を著しく減少させ、これに連鎖し肉食性の生物の個体数も減少させる要因となりうる。

当然ながら、このような海浜清掃が行われている三浦半島の砂浜では、従来記録されていた生物の個体数や種数の著しい減少が観察されている。

砂浜生態系を維持するには

三浦半島を含め相模湾沿岸域は、アカウミガメの産卵地の一つでもあり、毎年、少ないながらも産卵を伴う上陸が記録されている。絶滅危惧種として知られるアカウミガメの産卵が確認されると、地元の有志が稚ガメの孵化脱出を心待ちに柵を作り、しばしば必要以上に厳重な「保護活動」がみられることがある。産卵巣付近に海浜植物が侵入すれば、これを刈り取り、孵化間近になれば、稚ガメの歩く道を重機で整備することもある。これらは本当に必要な保護なのだろうか？

アカウミガメをはじめ、すべてのウミガメ類は、一生のほぼすべてを海洋で過ごす生き物である。砂浜生態系においてウミガメは、メスが産卵のために上陸し、稚ガメが脱出までの一時期を利用するだけのゲスト種にすぎない。

これに対して、砂浜に常時生息する生物の多くは、照りつける太陽からの暑さを逃れるために、日中は砂中に潜り、夜間砂の表面で活動する日周活動を行う。この行動は砂を攪乱させ砂中に新鮮な酸素を送り込み、砂浜を好氣的な環境として維持する結果となる。

個体数を減少させているとされるウミガメ類の保護も必要なことではあるが、砂浜という環境を理解せず、ウミガメに特化して保護する行為や、ヒトの価値観だけで行っている海岸清掃などは、砂浜の生態系にとってどれほどの負のインパクトを与えているのだろうか。原点に立ち戻り、生態系の正しい理解の上で環境を見つめる眼差しが現代人には必要なのではないだろうか。



【生物保全・再生の知恵】

相模湾沿岸におけるアカウミガメ産卵巣保全の取り組み

新江ノ島水族館／小谷野有加

はじめに

どなたでも一度は、テレビ番組等でウミガメの産卵シーンをご覧になったことがあるのではないのでしょうか。でも、それは遠い南の島での出来事・・・と、私も現職に就くまではそう思っていました。しかし、世界に7種類いるウミガメの中でも、夏にはアカウミガメ、アオウミガメ、そしてときおり IUCN（国際自然

保護連合）のレッドリストで危機ランクの高い近絶滅種とされているタイマイやオサガメまでもが、相模湾にやってきます。さらに、アカウミガメは相模湾沿岸の砂浜で産卵します。

新江ノ島水族館では、前身の江の島水族館時代からかれこれ50年の歴史の中で、地域に密着した活動を行ってきました。アカウミガメの産卵巣の保全活動もそのひとつです。2007年からは、より本格的に、同

じく神奈川県で地道な研究や活動を続けてきた倉持卓司氏（葉山しおさい博物館）、矢ヶ崎朋樹氏（IGES-国際生態学センター）らと共に、ウミガメを含む海浜性の動植物と地域住民が共存できる環境をめざす活動を始めました。相模湾の砂浜に産み落とされたウミガメの卵は、人の手を介さず、できるだけその場で孵化して、子ガメが元気よく海に帰ってほしい。さらに、地域住民の方々に、ウミガメを含めた海浜性の動植物が生息できる砂浜の保全を一緒に考えていただけませんかという取り組みです。

ウミガメの産卵巣保全をできるだけ、人の手を介さない方法で行うには理由があります。従来の方法では、砂浜に産み落とされた卵を別の場所に移植し、子ガメが砂中から出てきて数日から数年経ったのちに放流していました。しかし、研究が進むにつれ、この方法の問題点が指摘されるようになってきたのです。

まず移植により、子ガメの性比が偏る可能性があります。ウミガメは母ガメの体内ではなく、卵が産み落とされてから、孵化するまでの期間に性別が決まります。温度依存性決定といって、発生段階の中期の砂中温度が、アカウミガメでは29℃未満ならオス、29℃より高ければメス、29℃ではオスとメスがほぼ半数ずつ生まれます。つまり、性別が遺伝子ではなく温度によって決まるため、産み落とされた場所から移動すると、卵が経験する温度が変化します。本来オスとして生まれるはずだった子ガメがメスとして生まれるなど、自然に保たれていた性比のバランスが崩れると言われています。



アカウミガメの子

また、子ガメは基本的に、捕食者の活動が鈍くなる夜間から明け方にかけて砂中から脱出し、帰海しますが、放流は通常昼間に行われるため、相模湾沿岸では特に、昼間活動するカラスや海鳥などに捕食される危

険性があります。さらに、子ガメが砂中より脱出後、約24時間は活発な状態であり、それを過ぎると沖に泳ぎ出る力が弱まり、波に押し戻され、沖に出られなくなることがあります。また、子ガメは砂浜を這っている間に方向を感じ取る能力を獲得するとも言われており、直接海に放流してしまうと、その能力を獲得する機会を奪う可能性があります。

私たちの研究

そこで、相模湾沿岸においてできる限り人の手を介さない方法でアカウミガメ産卵巣保全を行うために、私たちは以下の3点に関して調査・研究を行っています。

1. 過去に自然環境下で産卵、孵化・脱出に成功した砂浜はどこなのか
2. 現在の相模湾沿岸における産卵、孵化・脱出の現状、砂浜の環境はどうなっているのか
3. 相模湾沿岸の砂浜は今後も産卵が期待できる環境なのか

1. 相模湾沿岸の産卵記録

過去の記録（丸山ほか1999・2000、および江の島水族館・新江ノ島水族館の未発表記録）をひも解くと、1960年から2012年にかけて相模湾沿岸におけるアカウミガメの産卵、子ガメの孵化・脱出の記録は87件あり、その中でも多かったのは鎌倉市（19件）、藤沢市（13件）、小田原市・平塚市（各11件）でした。この50年間の記録から、相模湾沿岸にはアカウミガメが産卵する環境は細々と残ってきたと言えます。ただし、亀崎らによると2012年の日本全国のアカウミガメの総産卵回数は14,531回でしたが、相模湾沿岸では、私たちが把握している限り、たった4回にすぎません。

2. 調査から知る相模湾沿岸の砂浜のすがた

私たちが調査を始めた2007年から2012年までの6年間に、新江ノ島水族館に寄せられた情報をもとに行った調査結果を詳しくみてみましょう。

移植しなければならなかった産卵巣は全体の32%であり、移植が必要となった要因としては、砂浜の地形等による自然要因（4巣）、人為的な要因（2巣）でした。

また、高波により2巣が流出しました。脱出率は、全卵数が不明だった場合および全卵が未発生であった場合を除いて43～94%でした。



孵化調査のようす (平塚海岸)



高波で削られた海岸 (平塚海岸)

一方、産卵の約一週間後から孵化・脱出時まで測定した産卵巣付近の深さ40～70cmにおける砂中温度は22.0～32.0℃でした。ウミガメの卵にとって砂中温度が22℃未満あるいは34℃が長期間続くと、孵化率が著しく低下すると言われていています (Miller et. al., 2003) が、私たちが調べた砂浜は少なくとも、危険な温度が長期間続くことはなく、ウミガメの卵にとって適応範囲内だったと言えます。

私たちは同時に産卵巣付近の地形や植物相、動物相の調査も行いました。私たちが調査した多くの地点で、産卵からふ化までの間に、台風や高波等の影響で、砂浜の地形の大きな変動が見られました。また、砂浜ではハマヒルガオやハマボウフウなどの海浜植生だけではなく、むしろ、より内陸部の安定帯や路傍に生育する植物が多く見られ、砂中に生息する動物は、ヒメハ

マトビムシなどごく限られた種しか見られませんでした。

3. 相模湾沿岸の砂浜の今後

現在、相模湾沿岸の砂浜は、人工の構造物建造による潮流の変化や、河川からの砂の流入減少などが要因となり、砂の流出が続いています。よって、浜の奥行きは狭く、高波による影響を受けやすい砂浜が多いのが現状です。さらに砂浜の人の利用頻度が高いため、移植を余儀なくされることも頻繁にあります。しかし、子ガメの脱出率や砂中温度から考えると、相模湾沿岸の砂浜はアカウミガメにとって適応範囲内にあり、今後も現在の砂浜の地形を保つ限り、アカウミガメの産卵は細々とではありますが、可能であると推測されます。もし、現在よりもさらにウミガメを含む海浜性の動植物を保全しようとするのなら、いくつかの相模湾沿岸の砂浜および沿岸海域を保護区に指定し、人の利用を制限する取り組みが有効かもしれません。

アカウミガメの産卵が普通に見られる砂浜へ

相模湾沿岸のウミガメの産卵巣と砂浜の環境保全のためには、今後ますます砂浜を管轄する行政と地域住民の方々との理解が重要になると、私たちは考えています。

そこで、行政向けとして、『相模湾沿岸域におけるウミガメ類産卵地の現地保護に関する指針』を、アカウミガメの産卵や孵化・脱出に立ち会った地域住民の方々には『ウミガメと人の共存をめざすためには』という印刷物を配布し、少しでも関心が高まればと思っています。

また、学校や地域のコミュニティなどに対して、機会があるごとにウミガメを含む海浜性の動植物とヒトとの共存や砂浜の環境保全に関しての講話を行っています。新江ノ島水族館に併設するなぎさの体験学習館では、ウミガメプールの解説板で、私たちの調査結果を紹介しています。

アカウミガメの産卵が特別なものではなく、普通に見られる砂浜をめざして、私たちは今後も地道な活動を続けて参りますので、みなさまのご理解とご支援をお願いいたします。

参考文献

丸山一子, 中村一恵. 1999. 神奈川県におけるアカウミガメの記録. 神奈川自然誌資料; 20: 33-38.
丸山一子, 中村一恵. 2000. 神奈川県におけるアオウミガメ・タイマイ・オサガメの記録. 神奈川自然誌資料; 21: 17-23.

亀崎直樹, 谷口真理. 2012. 2012年日本のウミガメの上陸・産卵状況. 日本ウミガメ誌 2012; 19-20.

Miller J. D., C. J. Limpus and M. H. Godfrey. 2003. Nest Site Selection, Oviposition, Eggs, Development, Hatching, and Emergence of Loggerhead Turtles. Loggerhead Sea Turtles; 125-143.



【森づくりの現場から】

「森づくりははじめました」

岩手県普代村教育委員会事務局／森田 陽

植樹事業の担当になり、1年前に森づくりと出会いました。

1年前は未知と不安の中で、事業を成功させることだけを考えていましたが、今は必要性を確信し、湧き出る熱意を肯定し、森づくりを続けていくことは必然なものになっています。

震災直後、近くの村の瓦礫撤去作業を手伝わせていただきました。

作業を始めるまではどんな感情に襲われるのか想像がつかなかったり、自分の中の偽善的な部分を疑ったりと、とても不安定な心理状況でした。

しかし、作業を始めてすぐに瓦礫や泥の重さ、痛さ、湿り気等を手の平で感じ、気がつけば無心になって作業をしていました。「とにかく、やらなくてはならないことだ」と本能で感じたのだと思います。

それからしばらく経って、初めて森づくりを経験しました。場所は同じ岩手県の大槌町でした。横浜ゴムの支援による植樹会で、瓦礫を混ぜ込んだマウンドに木を植えました。

会場とその周辺は津波の被害を受けた場所で、あちこちに瓦礫の山があり、悲劇の跡が色濃く残っていました。

作業に取り掛かり、ポットから苗木を外して植えた時、瓦礫撤去作業の時に感じたものと同じものを手の平で感じました。

「とにかく、やらなくてはならない」

初めての経験でも、それが同じ感覚であることは明らかでした。その時に感じたものは、植樹祭の準備・開催、どんぐり拾い、植樹祭への参加等の経験を重ねるうちに確信に変わり、言葉でも表現できるようにな

りました。

今思えば、その時が自分にとっての森づくりが“担当する仕事のひとつ”から“一生続けていくこと”に変わった瞬間だったのだと思います。

震災後、沢山のご支援をいただいています。ただただ感謝するばかりです。

ご支援いただく時に「何が必要ですか?」「自分にできることを…」と言っていただくことがあるのですが、私は「木を植えてください、森をつくってください」とお願いしたいです。

それは被災地に限った意味ではなく、自分が暮らしている地域にも森をつくって欲しいという意味です。

今後訪れる大地震等の災害に備えて森を作ることは、避難グッズを詰め込んだリュックを用意しておくことや、避難場所を確認して日頃から訓練すること等と同じくらい必要なことで、それ以上に意義が大きいものです。だから出来るだけ多くの人に森づくりをはじめて欲しいと思うのです。

たった1年でこんな考えを持てるようになりました。

森づくりに出会えたことに感謝しています。



普代小学校での植樹を終えて 2012.8.7

お知らせ

平成 25 年度人材育成事業 イベント開催のご案内

①環境学習「まちの熱をはかろう」

歩道、芝生、葉っぱ、土、木かげなど、身のまわりのいろいろな表面温度をはかりながら、横浜の街中を散策します。まちの熱をはかって身近な温暖化問題を考えましょう。

■開催日：平成25年8月24日（土）

■時間：午前10:00～14:00

■集合：みなとみらい線「元町・中華街駅」
5番・元町口 午前10時

■参加費：無料

■対象：小学6年生以上と保護者

■募集人員：20名

■講師：矢ヶ崎朋樹（IGES-国際生態学センター研究員）

■備考：各自お弁当をご持参下さい。神奈川近代文学館の和室で昼食をとります。野外を歩きますので暑さ対策をお願いいたします。散策ルートは「フランス山→港の見える丘公園→近代文学館」の予定です。

②生態学研修（初級コース）

野外での植物の調べ方をはじめ、潜在自然植生の考え方など、植物社会学における基礎的概念を中心に学びます。身近な植物の名前や植生調査の方法を知りたい方、植物・植生学分野を初めて専攻する学生のみなさんなど、ふるってご参加ください。

■開催日：平成25年9月23日（月）

～9月25日（水）3日間

■場所：横浜情報文化センター（室内）、
神奈川県立四季の森公園（野外）

■参加費：一般35,000円 学生20,000円（食事・宿泊費別）

■対象：一般（高校生以上）

■募集人員：30名

■プログラム：詳細はセンターホームページ（以下）をご覧ください。
http://www.jise.jp/info/info_H25kenshuu.html

お問い合わせ・申し込み先

総務担当 大槻みき子
Tel. 045-322-1223 Fax. 045-322-1225

Mail : ecoinfom@jise.jp

【研究員活動記録】

- 4/1-9 : ラオス人民民主共和国森林資源 / 植生調査 (矢ヶ崎)
- 4/2 : トヨタ自動車(株)上郷工場講演 (宮脇)
- 4/3-9 : ケニア共和国植樹ツアー (宮脇・林)
- 4/4 : 埼玉県荒川堤外地「ハンノキの里」調査打ち合わせ (村上)
- 4/6-9 : マレーシア・サバ州熱帯雨林研究協議 (目黒)
- 4/10-11 : 岐阜県多治見市周辺植生調査 (矢ヶ崎)
- 4/11-13 : 北海道せたな町植生調査 (林)
- 4/13-22 : 屋久島における育苗技術指導及び植生調査 (矢ヶ崎)
- 4/20-22 : 屋久島における植樹技術指導及び植生調査 (宮脇)
- 4/20 : 埼玉県荒川堤外地「ハンノキの里」調査 (村上)
- 4/24 : 富士市田子の浦ピオトープ調査打ち合わせ (村上)
- 4/24-26 : 岐阜県多治見市周辺植生調査 (矢ヶ崎)
- 4/27 : IGES-JISE 連続講座「森づくりとサイエンス」講師 (矢ヶ崎)
- 4/30 : 伊豆半島外来種調査打ち合わせ (村上)
- 5/2-3 : 自然体験活動（さばえキッズエコラボ 2013）講師 (矢ヶ崎)
- 5/4 : 福井県鯖江市内多雪斜面植樹実験地植生調査 (矢ヶ崎)
- 5/5 : 神奈川県大磯町、辻堂海浜植生調査 (村上)
- 5/6 : 湘南国際村第7回めぐりの森植樹祭 (宮脇)
- 5/8 : 神奈川県平塚市「B&G 植樹リーダー研修会」講師 (宮脇・林)
- 5/14-16 : 香川県丸亀市日本財団森づくりのための植生調査 (林)
- 5/17 : 研究助成金審査会及び授与式 (宮脇・村上)
- 5/18 : 埼玉県荒川堤外地「ハンノキの里」調査 (村上)
- 5/19 : トヨタ自動車(株)上郷工場植樹祭 (宮脇)

❖ **編集後記** 今年度の連続講座、眺めの良い横浜港の赤レンガ近くの会場に30名ほどの方にご参加いただきスタートしました。また、今年度は、『生態学研修』も復活します。Newsletterも編集体制を整え、会員の皆さまにきちんとセンターの活動をご報告できるように頑張ります！次号は10月頃を予定しています。（林 寿則、大槻みき子）

JISE Newsletter Vol.65

発行者：(公財)地球環境戦略研究機関 国際生態学センター 発行年月日：2013年7月1日

〒220-0073 横浜市西区岡野 2-12-20 横浜西合同庁舎 3F Tel:045-322-1223 Fax:045-322-1225

E-Mail:ecoinfom@jise.jp URL:<http://www.jise.jp>

※この冊子は再生紙（古紙配合率100%を使用しています。）